

## 選考委員賞

### 石垣島での自然保護

赤坂中学校 西石垣 美海

『ニライカナイ』という言葉があります。父のふるさと石垣島の言葉で、海の向こうの神様が豊かな幸せを運ぶと信じられています。毎年旧暦に合わせて村ごとにさまざまに自然の恵みに感謝する祭りが行なわれ、地域の小学生から老人までが、パレードのように村をねり歩きます。その時に稲などを祭り、海の神と山の神（漁業と農業）に分かれ、つな引きをして、どちらが勝つかをきそい、祭りの後には、実りの雨がふり、みな、大喜びしています。不思議だなと思いつつ、今でも守られている昔の人の教えなのです。

祖父にいろいろ聞いてみました。祖父はハブ取り名人とよばれていました。『ハブ』は小さな森の岩の中や、家の石垣などに住み、名物のハブ酒の原料になるため、一匹五千円程度で取り引きされた、高価なものでしたが、リゾートホテルや住宅に開発され、今では取れなくなつたそうです。山では、島のシンボルの『カムリワシ』が少なく、同じように近くの島の絶滅危惧種『イリオモテヤマネコ』も、二十年前には見たが、今では、開発のため、めつたに見

ない」と言われました。『ヒルギ』という名の『マングローブ』は世界的な運動から、ボランテイアによる植林のため守られており、世界一といわれる海のサンゴは、高級品として乱獲され開発による、赤土の流出により白化現象が問題になっていきます。水中写真で有名な写真家（母の知人）も、「大変なことが起きている」と、何年も前に言われていました。それを防ぐために、WWF（世界自然保護基金）のサンゴの研究施設が村に作られました。その海岸では、生活の糧として、『アーサ』（青ノリ）が取れました。

海のきれいな郊外の村にも、高層リゾートマンションやホテルが建つようになり、景観を守る市の条例が作られています。となりの竹富島では、早くから昔のまちなみを守るきびしい条例が、島民の間で決められ、逆に映画の撮影などで使われ、自転車で島を周り、水牛も歩いているような所になっています。しかし、島の中では、牛乳を売っているスーパーはなく、食べ物も船で届けてもらうか、買い出しに行かないといけません。それでも、その島のいとこのお兄さんは、長い間水道が島に引かれなかったために、すぐく少ない水の量で皿洗いをしていたそうです。雨水がたよりだという生活だったからです。この島では、十日間通して行うような六百年も続くお祭り（種取祭）が有名です。一つの小さな種が実を結ぶまでのおどりや歌と祈りが延々と続いているそうです。

私はガールスカウトで、バスや新幹線で森に出かけ、テ

ントを張り、わずかな水で生活し、虫がたくさんいる中で、暗闇の中わずかな光を頼りに、キャンプをしてきました。いつまでもそのような場所が消えないように、環境を守らねばと強く思います。